小説と詩と評論　東京都

長い年月の同人雑誌

森田雄蔵賞を主宰

「小説と詩と評論」誌は、木々高太郎（一八九七～一九六九）の主宰で、一九六三年二月に創刊された。木々氏は、昭和十一年に「人生の阿呆」で直木賞を受賞。戦後は、昭和二十一年「新月」で探偵作家クラブ賞を受賞し、その後、同クラブの会長を務めるなどして、多方面にわたる文学者との交流があったという。そうした中で「小説と詩と評論」は発行された。松本清張も本誌の同人であったと伝え聞くところである。

木々氏の死後、森田雄蔵氏（一九一〇～一九九〇）が主宰となった。森田氏は木々氏の思想を受継ぎ、二十一年にわたり発刊を続けた。森田氏は『岳父書簡集』『料亭の息子』などが代表作である。

当時の「小説と詩と評論」は月刊誌だった。そして発行ごとに合評会があった。殴り合いなども珍しくない激しい合評会でもあったという。

一九九〇年代に入ると、年一回の発行となった。主宰者は、美倉健治、陽羅義光と変わり、二〇〇〇年からは野辺慎一が受け継ぎ現在に至っている。

本誌は、年会費は無料である。小説や詩、評論などを掲載した場合のみ、一頁当たり四千円の費用負担がある。その金額で、関係機関、関係者などへの配布（四百部）もすべてまかなう。

発行後は必ず合評会を催す。合評会時には、本誌が十五年に亘って実施している森田雄蔵賞の授与式がある。この賞は全国の同人雑誌の隆盛を願い、また、森田雄蔵氏の熱意等に感謝し、創設したものである。送付いただく全国の雑誌の中から選考委員が選ぶ。

今回、嶋津治夫氏が貴誌「文芸思潮」に掲載されるが、嶋津氏は農民文学会の会長である。彼は、勤務先でも地域の農業・農業者の指導者として生きた。そこで培った技術・農民愛、日本農業の課題、農業政策への問題提起など、農の分野の幅が広い。その中での自分自身への反省などもあり、読む者を魅きつける。おだやかな人間性と愛の充満はわれらを氏の虜にする。氏の作品を読み進めるうち、感傷とは違う、生きるという意味をわれらに問うているのだということに気づき始めるのだ。

この頁をお読みの皆さん、ぜひ「小説と詩と評論」にご参加ください。新しい自己に出会えるかもしれません。

（野辺慎一）

直木賞作家が創刊して半世紀

「小説と詩と評論」合評会風景

森田雄蔵賞授賞式

小説と詩と評論
〒123-0864　東京都足立区鹿浜3-4-22のべる出版企画
主宰　野辺慎一　　TEL03-3896-6506